

ポローニア

paulownia



共同制作:「みんなのいもむし」 稲見侑晟、大森清隆、木田咲人、友野航、本間栗月、森愛奈
(附属久里浜特別支援学校 小学部2年生)

目次

教育局次長挨拶

巻頭言「境界を乗り越えて人と人とのつながりを」

◆濱本悟志 2

「共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集い」を開催

◆雷坂浩之 2

すべては子どもたちの笑顔のために ◆由井蘭 健 3

第8回高校生国際ESDシンポジウム・The 1st SDGs
Global Engagement Conference@Tokyoを開催

◆建元喜寿 3

附属高校の沖縄修学旅行 ◆附属高等学校 二学年担任団 4

雑司ヶ谷祭について ◆石井裕志 4

委員長陣選挙と生徒会活動開始のご報告 ◆栖原 昂 5

高3課題研究発表会 ◆山田忠弘 5

『共に学び、共に育つ』

～大塚オリパラ教育が目指すもの～ ◆紅林 仁 5

卓球部の活動を通して ◆奈良 歩 6

令和元年度 自閉症の子供を理解するための学校公開

◆石川千尋 6

令和元年度 教育実習を実施 ◆徳竹忠司 7

第50回 桐が丘祭 ◆向山勝郎 7

朝永振一郎記念 第14回「科学の芽」賞

表彰式・発表会開催 ◆濱本悟志 8



筑波大学
University of Tsukuba

附属学校教育局

<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp>

vol. 47

境界を乗り越えて人と人とのつながりを

附属学校教育局 次長 濱本悟志



SATOSHI
HAMAMOTO

学校には児童生徒の活動を支える二つのカリキュラムが存在しているといわれています。一つは学業で、設定された教育課程の下で継続的に進められる「明示的なカリキュラム」です。そこでは、先人たちが知恵を絞り後世に残した普遍的妥当性を学び、そのノウハウを現代的な課題解決に活かす学習が行われています。

もう一つは学校独自に設定された特別活動で、その活動や人のつながりから多くを学ぶ「潜在的なカリキュラム」です。そこでは、児童生徒たちが主役となって企画や運営に携わり、時にはリーダー時にはフォロアーと役割を替えて直面する課題に挑戦します。その過程で作り上げる苦楽を経験し、個性と能力の違いに気づき、そして互いに掛け替えのない存在であることを学びます。

人のつながりには、テーマを限定し特定の集団で深くつきあう方法と、共通テーマを設定し新たな出会いと予期せぬ効果を求めて広くつきあう方法があり、どちらも大切です。筑波大学附属学校群では、育った環境や文化、学校種、年齢、得手不得手などを飛び越えて、互いに個性と能力を伸ばす試みを大事にしています。

本号をご覧いただき、児童と生徒の「境界を乗り越えた」活動の楽しさを共有していただければ幸いです。

「共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集い」を開催



附属学校教育局 共生シンポジウム実行委員長 雷坂浩之

本年度も「共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集い」が、令和元年12月8日、筑波大学附属中・高等学校の桐蔭会館と体育館において開催されました。この催しは今回で6回目となりますが、年々参加者が増え、本学附属学校群全校の児童生徒や教員、保護者、一般の参加者を合わせ約260名の方々にご参加いただきました。

第1部は講演会で、附属視覚特別支援学校の卒業生で、シドニーパラリンピックの400メートルリレー銀メダリストである星野直志氏をお迎えし「動く・繋がる。変わる一自然な共生に向けて歩み寄るのは障害者側かも？」というテーマでお話していただきました。

当初は普通学校に在籍していて、その後視力の低下で盲学校に転入し、阪神淡路大震災で被災したことを機に附属視覚特別支援学校に転校した当時のお話から、高等部に進学後は陸上選手としてパラリンピックを目指したこと、専攻科鍼灸手技療科を経て、あん摩マッサージ指圧師・はり師・灸師として就職し、現在は働きながら大学院でも学び続けていることなど、星野氏の「障害を周囲に意識させない」前向きな生き方に関するお話を沢山お聞きすることができました。

第2部は附属学校の児童生徒によるシンポジウムで、「三浦海岸共同生活ー附属11校が一つになった3日間ー」というテーマで、はじめて附属学校群全校の児童生徒が揃い、自分たちが共

同生活で得た「気づき」や「考え」を発表しました。

第3部では、「ボッチャ」と「ホッキュー」のふたつの球技の体験を通して、障害者スポーツやアダプテッドスポーツの理解を深めました。

この集いは、参加者が、互いの個性を尊重し合いながらこれからの共生社会を目指す意義や課題を共有する良い機会となりました。

児童生徒の発表場面



講演する星野氏



ホッキューの体験



すべては子どもたちの 笑顔のために

附属小学校 教諭 由井 蘭 健

附属小では、毎年11月に若桐祭が開催される。この祭は、「すべては子どもたちの笑顔のために」をモットーに、附属小の保護者によって運営される文化祭である。

当日、校内でさまざまなイベントが開催されるのだが、驚くのはその質の高さである。保護者は、学級ごとに企画したイベントについて、9月から入念な準備をし、当日も子どもと一緒に全力で楽しむ。



ムシバル

例えば、「ムシバル」というイベントでは、スポンジ、ストロー、コルク、ゼリーのキャップ、どんぐり、ビーズ、アクセサリ、貝殻、まつぼっくりなどの多くのパーツを自由に組み合わせ、自分だけのオリジナルの「ムシ」をつくる。しかも、一人ひとりがつくったオリジナルな「ムシ」を土俵に載せ、相撲をとらせて勝負ができるというイベントなのである。他にも「テンセグリティ（押すと平面になる多面体）づくり」や「勾玉づくり」、「万華鏡づくり」、「バスボム（入浴剤）づくり」などの“ものづくりイベント”が多数ある。

また、「パズル遊び」や「宝の石（鉱物）探し」、「駄菓子釣り」、「スリッパ卓球」、「迷路」、「ヤカーリング」（タイヤの着いたヤカンでカーリング！）など“活動的なイベント”もある。今年度は、「国旗ビーズづくり」や「ポッチャ」など「2020 オリ・パラ」イヤーイベントも企画された。

出店では、カレー、ホットドッグ、フランクフルト、チキンナゲット、ワッフル、ハーゲンダッツのアイスも食べられる。「縁日広場」や「くるくるパン」などのイベントもある。



ポッチャ

講堂の、「若桐パフォーマンス」では、2年生以上の子どもたちによって、歌やダンス、漫才などが行われる。若桐祭のフィナーレは、校歌の大合唱。子どもたちは感謝の気持ちを保護者に伝え、若桐祭はその幕を閉じる。



第8回 高校生国際 ESDシンポジウム The 1st SDGs Global Engagement Conference @Tokyo を開催

附属坂戸高等学校 主幹教諭 建元喜寿

本年度も、2019年11月7日(木)に、筑波大学東京キャンパスにおいて、恒例となった第8回高校生国際ESDシンポジウムを開催しました。これまでのSGHの成果を活かしつつ、本年度からは文部科学省WWL事業の幹事管理機関である筑波大学の拠点校として、新たに、筑波大学附属学校群、海外連携校、国内連携校、ユネスコスクール、ESD関連校等が参加し「The 1st SDGs Global Engagement Conference@Tokyo」として開催しました。筑波大学留学生のファシリテートによるSDGsワークショップ、企業等との連携によるエシカル消費に関するワークショップなど、新たな企画にも挑戦しました。来年度以降も、WWLによるAL-Network（アドバンストラーニングネットワーク）を活かしたシンポジウムを開催していきたいと思います。

シンポジウム期間中は、校内で国際交流活動も行います。今年は、オーストラリアから新たに参加があり、昨年度に引き続き、愛媛大学附属高等学校から提供いただいたもち米をみんなでついでいただきました。「筑坂」は、これからも国内外の高校生がつながっていく拠点として活動を続けていきたいと思います。

なお、来年度のシンポジウムは2020年10月29日(木)の予定です。多くの皆様のご参加お待ちしております。東京キャンパスor筑坂でお会いしましょう！





附属高校の沖縄修学旅行

附属高等学校
二学年担任団

2019年11月25日(月)から29日(金)にかけて、本校

第二学年の生徒が沖縄県への修学旅行に出かけました。生徒主体で計画・運営を進め、「学問を修める」「人との関わり方を学ぶ」ことを大きなテーマとして実施されました。行程の概容は以下のとおりです。

- 1日目 クラスごとに平和学習
(平和祈念公園、ひめゆりの塔、糸数壕を訪問)
- 2日目 班別自主学習、エイサー鑑賞・体験
- 3日目 海洋実習、伊江島に移動して民家泊体験
- 4日目 民家泊体験終了後にコース別学習
- 5日目 班別自主学習後に那覇空港集合

1日目はクラスごとにバスに乗車し、沖縄県南部の戦跡を訪問して、戦争のもたらした惨禍と平和を維持する必要性について考えました。事前に学習していた内容を現地で改めて実感することができた貴重な体験でした。糸数壕やひめゆりの塔での説明に聞き入る生徒の姿が印象に残っています。また、今回の修学旅行の大きな目的の一つである沖縄の人との交流については、3日目の午後から伊江島

にわたり、グループに分かれて民家泊を体験しました。はじめは初対面の島の方々に遠慮がちに話していた生徒たちでしたが、翌日の昼の退村式ではそれぞれのご家庭で習った舞踊や三線の演奏を披露し、別れを惜しむ光景が見られました。伊江島の皆様のあたたかいおもてなしに、どの生徒も感激していました。

「毎日の内容が濃かった。」というのが、羽田空港帰着時の生徒の感想でした。多くの方々のご協力のもと無事に行事は終了したわけですが、今回生徒ひとりひとりが得た知見を、今後の生活の中で有意義に活用していくことを切に願います。

伊江島にて お見送りに応える



雑司ヶ谷祭について

本校の文化祭は雑司ヶ谷祭と呼ばれていますが、それは古い地名にちなんでいます。(この付近には雑色職を務めていた武士が住んでいたと言われ、この学校も一時期は東京教育大学教育学部雑司ヶ谷分校と呼ばれていました。)さて、その雑司ヶ谷祭ですが、生徒による行事としては最大のもので、来年度には60回を迎えます。毎年、5月に中学部から専攻科までの生徒による実行委員会が発足し、運営をしています。内容としては、作品展示、演劇・演奏、研究発表、模擬店を行っています。学校としての規模も、幼稚部まで合わせても200名に満たない小さな学校ですので、300名も入場しますと混雑してしまいます。そのような中で、受付係を担当した学年の生徒が工夫し



華道部の作品展示

附属視覚特別支援学校 副校長 石井裕志



たのが、入構証にバーコードを入れ、リーダーで読み取らせることで入退場者を管理するシステムです。このシステムのおかげで、入構証を返却しない人を探すのが容易になり、何度も校内放送で呼び出さなくても良いようになりました。本校でも行事の見直しが迫られていますが、縮小する事ばかり考えるのではなく、生徒達自身の工夫で省力化し、内容の充実を図ってほしいと考えています。





委員長陣選挙と生徒会活動開始のご報告

附属中学校 生徒部 選挙管理委員会担当教員 栖原 昂

本校では生徒会長に当たる桐陰会委員長と、2名の副委員長を総称して委員長陣と呼んでいます。

2020年度の委員長陣選挙は昨年11月13日(水)に行われ、約2時間半、計4回の投開票を経て6名の候補者の中から次期委員長陣となる2年生3名が選出されました。選挙活動は各教室での演説、候補者どうしの座談会、ポスターセッション、全校での立会演説会などが約1か月かけて行われ、候補者はもちろんのこと、全校生徒が次年度の自治活動について真剣に考える期間となりました。

本校の生徒会活動は1月にスタートします。委員長陣の活動も1、2年生約400名の中から生徒会15団体として活動する生徒とその正副責任者を委員長陣3人の協議によって選出し、年始に任命するところから始まります。今年度の生徒会活動は、新たなメンバーによってまさに動き出したところです。



高3課題研究発表会

附属駒場中学校・高等学校 教諭

山田忠弘



9月21日(土)午後、本校50周年記念会館にて高3課題研究発表会が開かれました。

口頭発表7報(化学、生物、数学、情報、障害科学)が行われ、在校生の他に附属特別支援学校教員・OBなどの参観がありました。

本校では、高2で課題研究を全員履修し、高3では、希望者がその研究をさらに進めて発表を行います。

各発表は海外研究交流や他SSH発表会での発表を経ており、スライドなどを見やすく、分かりやすくする工夫が見られました。

事後のアンケートでは、「それぞれが面白い独自の着眼点から研究を行っていてとても興味深い」などの記述がありました。本校が会場で参加(発表)や参観が気軽にできるため、仲間の研究に刺激を受け、学習意欲を高める一助になっていると思われます。



『共に学び、共に育つ』 ～大塚オリパラ教育が目指すもの～

附属大塚特別支援学校 教諭 紅林 仁

大塚特別支援学校では、オリパラ教育を全校生徒で学び合う『大塚オリパラデー』という学習があります。オリパラ教育の目標は①生涯を通じたスポーツ活動、②多様な価値観、③他者への敬意、の3つを目標の大きな柱としています。今年度は年間5回を設定して、幼稚部から高等部までの幼児児童生徒全員が体育館に集まって行われました。

6月15日の「第2回大塚オリパラデー2019」では、オリジナルのルールで設定したボッチャ大会が開催されました。小学部の児童が傾斜台を使ってボールを転がす様子を中学部の生徒が応援したり、高等部の生徒がボールを転がす様子を幼稚部の幼児が目を輝かせながら見つめたりする様子が印象的でした。活動を通して自己や他者への気付き、お互いの価値を認め合う姿に大きな成長を感じました。



卓球部の活動を通して

附属聴覚特別支援学校 教諭

奈良 歩

中学部では、陸上競技部、卓球部、野球部、バレーボール部の4つの部活動があり、生徒全員がいずれかの部活動に参加し、体力の向上や健全な成長・発達のために活動しています。卓球部では、毎年、静岡を含む関東地区11の聾学校で行われる関東聾学校中学部卓球大会での優勝を目標に、放課後や休日を使って活動しています。

毎日の放課後練習では、正しいフォームで返球ができるように基本練習を中心に、休日練習では、多球練習、試合形式での練習を行っています。生徒たちは「一球入魂」を合言葉に、毎日の練習に汗を流しています。



今年度の関東聾学校中学部卓球大会での成績は、1部男子団体戦が第3位、1部女子団体戦では優勝という成績を収めました。また、女子は団体戦4連覇を果たすことができました。個人戦でも、3年生の女子生徒が優勝したほか、多くの選手が入賞することができました。

大会で好成績を取っていますが、選手全員が運動が得意というわけではありません。運動が苦手という生徒も多く、入部したての頃は、ラケットにボールをあてることすら大変という状況でした。「練習しても試合に勝てない」と弱音を吐く生徒もいました。そんなとき、3年生を中心とした先輩たちが後輩に声をかけ、励まし合いながら練習を積み重ねるといった様子が見られます。こういった経験は、普段の学校生活ではなかなかできない経験で、部活動だからこその活動だと感じています。練習の成果を試合で発揮し、少しずつ勝てるようになることで運動が苦手な生徒の自信にもつながります。生徒一人一人が元気に、そして楽しんで活動に取り組めるよう顧問としてこれからも指導していきたいと思っています。



令和元年度 自閉症の子供を理解 するための学校公開

附属久里浜特別支援学校 教諭 石川千尋



シンポジウムにおける本校児童の発表の様子

11月9日(土)に、「自閉症の子供を理解するための学校公開」を開催しました。教育活動の一端を紹介し本校のことを知っていただくこと、自閉症の子供について理解を深めていただくことを主な目的として、学校公開を行っています。当日は、教育関係者や近隣にお住まいの方など、100名以上の方が参加してくださいました。午前の部では、幼稚部の運動遊びや小学部の音楽などの授業の様子を参観していただくとともに、展示した教材・教具や子供たちの作品を見ていただきました。午後の部では、本校小学部と横須賀市立明浜小学校との「交流及び共同学習」の取組について、シンポジウムを行いました。シンポジウムでは、本校小学部6年生や明浜小学校の代表児童が壇上に上がり、一緒に活動した内容や、交流学习を通して感じたことなどを発表しました。参加された方からは、「双方の児童の発表が素晴らしかった。」「子供たち同士の関わりの変化や率直な気持ちを聞くことができ良かった。良い交流学习が進められていることが分かった。」といった感想を頂きました。

この学校公開を通して、本校の取組や子供たちの様子について知っていただくことができたのではないかと思います。今後も、より多くの方に自閉症の子供たちについての理解を深めていただけるような学校公開を企画し、開催していきたいと思っています。



教材・教具と作品展示

令和元年度 教育実習を実施

理療科教員養成施設 講師 徳竹忠司

理療科教員養成施設は、盲学校（視覚特別支援学校）で、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師（理療）の国家資格を取得するための課程（理療科）で、指導者として活動する教員を養成しています。修業年限2年間で最大89単位を取得します。2年間の施設学生としての活動の中には、いくつかのイベント的な活動がありますが、教育実習は重要かつ学生の成長に大きな影響を与えるものです。教育実習に向けて様々な科目を修得していきますが、2年生になると都内鍼灸専門学校・国立身体障害者リハビリテーションセンター理療教育部での授業見学、関東近県の盲学校での約1週間の視覚障害指導実習（受け入れ校により内容に若干の違いはありますが、授業参加・教員の補助・模擬授業・生徒とのコミュニケーションなど）、附属視覚特別支援学校でのオリエンテーション・事前授業見学を経て、3週間の教育実習に入ります。実習の最終日には、同一科目を担当してきた学生が3つのグループを作り、グループ内で授業の構成を検討し、代表者が研究授業を行います。今年度は、座学がリハビリテーション医学と手技療法理論の2コマ、実技実習が鍼実技1コマでした。座学では参加型の授業を取

り入れ、生徒の発言・意見交換の機会を多くする工夫がなされていました。鍼実技は、担当学生が全盲であったため、教室管理・生徒の活動状況の把握が課題として残りましたが、合評会に参加した1年生も含め視覚障害を有する教員としては乗り越えなければならない部分であることが実感できたことと思います。



教育実習の最終日に行われた
研究授業についての合評会（理療科）



第50回 桐が丘祭

附属桐が丘特別支援学校 教諭
向山勝郎

11月2日（土）に『第50回 桐が丘祭』が開催されました。今年

は校舎改築の関係で、例年と異なり1日開催となりました。各学部のカラーを発揮して、桐が丘祭を盛り上げました。高等部は学年を超えて演劇・ICT・文芸の3パートに分かれて企画が展開されました。企画の段階からそれぞれがアイデアを出し合い、練習を積み重ね、本番に向けて準備を進めました。文化祭当日は生徒一人ひとりが、次につながる成果と課題を発見できる1日となりました。

中学部は、1年生は「つくったのしもうパーカッション!!」、2年生は「ドキドキボーリング・ワクワクボールすくい」、3年生は「世にも奇妙な朗読会」を行いました。生徒が主体と

なり、事前の計画から当日の運営まで行いました。見通しをもつことや各自の役割を果たすことなどを目標に、試行錯誤しながら進めました。活動を通して、普段は気づかないようなお互いのよさにも気づき、それぞれに充実感や達成感を味わえたようです。

小学部で、午前中に学習発表会を行いました。1・2年生は『Enjoy dancing and music!（ダンス＆ミュージックをたのしもう!）』というテーマで英語を使った表現活動を、3・4年生は『よくみてくらべてたしかめて』というテーマで五感を活用して学習した成果の発表を、5・6年生は『KBSニュース「移動教室レポート」』というテーマで9月に行った移動教室の報告をニュース形式で行いました。どの発表も、日頃の学習活動の成果を十分に発揮し、見にきていただいた皆様にも楽しんでいただけました。



小学部／Enjoy dancing and music!



中学部／世にも奇妙な朗読会



高等部／ICTパート



朝永振一郎記念 第14回「科学の芽」賞 表彰式・発表会開催 (2019.12.21)

附属学校教育局 次長 濱本悟志

12月21日(土)、本学大学会館において、朝永振一郎記念第14回「科学の芽」賞の表彰式・発表会を開催しました。

「科学の芽」賞は、筑波大学にゆかりのあるノーベル物理学賞受賞者の朝永振一郎博士の功績を称え、それを後続の若い世代に伝えていくとともに、小・中・高校生を対象に自然や科学への関心と芽を育てることを目的としたコンクールです。

今回、国内の学校199校及び海外6か国9校(中国、大韓民国、タイ、ハンガリー、イタリア共和国、マレーシア)の日本人学校から小・中・高校生部門合わせて3,355件の応募がありました。その中から小学生部門10件、中学生部門8件、高校生部門1件の合計19件の作品を極めて優秀と認め、「科学の芽」賞を授与しました。

表彰式・発表会には、受賞者19名が出席されました。そのほかにも受賞者のご家族や学校で指導いただいた先生方など多数の方々も出席されました。

本学からは、永田恭介学長をはじめ清水諭副学長、木越英夫副学長、茂呂雄二副学長、金保安則副学長、佐藤忍副学長、阿部豊副学長、池田潤学長補佐室長、齋藤一弥数理物質系長、松本宏生命環境系長及び「科学の芽」賞実行委員会委員などが出席し、総勢で100名程の出席者となりました。

表彰式は、「科学の芽」賞実行委員会副委員長である濱本悟志附属学校教育局次長の開会の挨拶で始まり、次に永田学長から各受賞者に表彰状と記念の楯の授与と祝辞がありました。続いて、部門毎に受賞者の発表会と審査に携わった附属学校教員及び大学教員による作品の講評が行われました。発表会では、受賞者達がスクリーンに作品の概要を投影しながら研究の成果を報告したり、司会者からの質問に身振り手振りを交えて受け答えをしたりしていました。

最後に「科学の芽」賞実行委員会委員長の茂呂副学長の総評があり、その後、同会館のレストランにおいて懇談を催しました。懇談では受賞者のご家族や、副学長からも感想をいただき、終始和やかな表彰式・発表会となりました。

ご応募いただいた皆様、関係者各位に深く感謝を申し上げますとともに、来年度の「科学の芽」賞もどうぞよろしくお願いいたします。



●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol.47

発行日………令和2(2020)年 2月29日

発行者………附属学校教育局教育長 茂呂雄二

発行所………筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・バルーン

印刷………広研印刷 使用紙: U-limax [日本製紙]

